広報かがみの 12
2022年12月号 第214号 毎月1日発行

シリーズ 第151回

中島家の鎧

先般、香々美構大庄屋・中島家のご子孫から、鎧や陣笠、陣羽織、旗などの武具や裃・袴、書画など貴重な資料を寄贈していただきました。

「大庄屋」とは、江戸時代に十数か村を統括し、各村の庄屋へ藩からの指示の通達や年貢・夫役（労働）の割り当て、村々の訴訟の調整などを行う最上位の村役人です。津山藩松平家では、大庄屋の管轄する区域を「構」と呼び、中島家は寛延二年（一七二一）から代々香々美構の大庄屋を務め、香々美、藤屋、和田、貞永寺、土居、小座、瀬戸、上森原、下森原、馬場、塚谷、入の各村を管轄していました。

写真の鎧は、薄い小さな漆塗りの鉄板を紺色の紐で綴った、いわゆる紺糸威胴丸具足とよばれる型式のものです。写真では一部しか紹介していませんが、寄贈していただいたものは袖や籠手、臑当、背中に指物（旗など）を立てる受筒など、一式鎧櫃に納められていました。いずれも保存状態が良く、大切に管理されていたことがわかります。兜はありませんでしたが、鎧櫃の中に津山藩の合印である「剣大」をあしらった前立（兜の前に立てる飾り）が入っており、以前に中島家から寄贈された明治時代の写真の中にこの鎧兜を身に着けた写真もありましたので、本来は兜もあったようです。鎧は細部の意匠も凝っており、上級武士が所持するような立派なものです。ただ、大庄屋は当時の身分では農民になりますので、本来こうした鎧兜を所持する立場ではありません。ではなぜ、中島家にこのような立派な武具が伝わっているのでしょう。

幕末になると、世の中の不穏な動きに対処するため、たびたび軍事出動の要請がありました。財政難の津山藩では、これが大きな負担となっており、文久三年（一八六三）、藩は各村に命じて農民達を軍事夫役として動員する体制を整え、元治元年（一八六四）には、禁門の変で朝敵とされた長州藩を討伐するための第一次長州戦争に多数の農民を動員しました。この時、郷夫惣締という、農民（郷夫・陣夫）たちを率いる責任者として出雲に出征したのが、大庄屋・中島多右衛門の息子で、当時二十一歳の中島衛でした。この出征で衛は無事に役目を果たし、褒美として木盃を授与されています。また、慶応二年（一八六六）の第二次長州戦争でも郷夫繰出御用懸として、その任務に当たっています。

中島家に伝わる武具はこの長州戦争に際し準備された可能性が高いでしょう。農民とはいえ一軍を率いる者として非常時に備えていたのでしょうか。鎧兜・陣笠・陣羽織とも二揃いあることから、父の多右衛門用も準備していたのかもしれません。また、細部にこだわった意匠は、これほどの軍装を整えられる中島家の経済力と、農民の身分でありながら藩の任務に携わり、いざとなれば武士以上の働きを見せようとする意気込みが伝わってくるようです。

中島家は、これまでも藩からの様々な要望に応え、藩主からの信頼も厚かったことが記録に残っており、それを裏付けるように今回の寄贈資料の中にも、藩主から賜ったであろう松平家の家紋が入った裃や袴などもありました。詳細な調査はこれからですが、津山藩との関わりや幕末の動乱期の中での大庄屋の立場、役割を知る上での貴重な資料になることは間違いありません。

中島家から寄贈された鎧

中島家の古写真（明治時代か）

中島衛

参考資料：『鏡野町史』『津山市史』『桝形・日上山城と香々美村の暮らし』「美作の民権家・中島衛について」

鏡野町教育委員会　生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】https://www.town.kagamino.lg.jp/